

Title	〈書評〉大谷栄一編『ともに生きる仏教：お寺の社会活動最前線』
Author(s)	小川, 有閑
Citation	宗教と社会貢献. 2019, 9(2), p. 61-71
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/73349">https://doi.org/10.18910/73349</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 書評

大谷栄一編

『ともに生きる仏教——お寺の社会活動最前線』

筑摩書房、2019年4月、新書版、254頁、820円+税

小川有閑\*

## 1. はじめに

2000年代以降、仏教界には僧侶を中心とした仏教者による社会活動が活発化している。評者はそのうねりを大きく「発信系」（情報発信）と「実践系」（社会活動）に大別したが<sup>(1)</sup>、編者の大谷は前者を「公共圏への積極的な関与」、後者を「公共空間での社会活動」と位置づけ、両者を日本仏教の公共的機能の活性化ととらえる。

だが、これは全く新しい展開ではなく、たとえば戦前の我が国において、仏教者は社会福祉の主たる担い手であり、メディア活用も盛んであったことを考えれば、現在の動向は「日本の公共空間における仏教のプレゼンスの再浮上を意味」（18頁）するものと捉えられる。「再浮上」ということは、戦後の日本仏教は公共空間においてプレゼンスが低下していたということでもある。低下から浮上というこのタイミングで、大谷は、従来の仏教観、宗教観の再考をうながし、それを本書の目的として提示する。

「本書では日本仏教＝「葬式仏教」という常識を真正面から問い直し、社会活動（社会問題の解決や人々の生活の質の維持・向上に寄与する活動）にアクティブに取り組む僧侶や仏教婦人、お寺の姿を紹介する」（はじめに、12頁）

「2011年3月11日の東日本大震災の発生に際し、仏教の持つ弔いや死者供養の力が再評価されたように、本書では「葬式仏教」の捉え直しも試みる。」（はじめに、13頁）

「宗教や仏教は個人の内面やこころの問題であり、社会の公的領域に関わるべきではない、と異を唱える人もいるかもしれない。しかし、本書ではそうした「常識」をも問い直し、私的領域／公的領域の区分、「宗教（仏教）と社会」の関係も再考したい。」（はじめに、17頁）

---

\* 大正大学地域構想研究所・BSR推進センター主幹研究員

日本仏教は生者には関わらず、死者供養を専門とするものという常識の再考、次に「葬式仏教」の内実、死者供養は死者のみを相手にするものなのかという再考、さらに、公的領域への宗教の関与のあり方の再考。本書は、現在の、そしてこれからの日本の仏教を考える上で持つべき視点を、まさに今、現場で汗を流している当事者（大谷と猪瀬以外は実践者）の語りを通して築き上げていこうという意欲作である。

## 2. 本書の構成と内容

まず、本書の構成と各章の概要を紹介していくこととする。

はじめに（大谷栄一）

第一章 なぜ、お寺が社会活動を行うのか？（大谷栄一）

第二章 貧困問題—「おてらおやつクラブ」の現場から（松島靖朗）

第三章 アイドルとともに歩む—ナムい世界をつくろう（池口龍法）

第四章 子育て支援—サラナ親子教室の試み（関 正見）

第五章 女性の活動—広島県北仏婦ビハーク活動の会（猪瀬優理）

第六章 グリーフケア—亡き人とともに生きる（大河内大博）

第七章 食料支援と被災地支援—滋賀教区浄土宗青年会のおうみ米一升運動（曾田俊弘）

第八章 NPO との協働から、終活へ—應典院の二〇年と現在、これから（秋田光彦）

現代仏教を知るためのブックガイド（大谷栄一）

あとがき（大谷栄一）

第一章は、これまでの研究成果と社会変化を丁寧で紹介しながら、寺院が社会活動を行う根拠を理論的に示すもので、本書の導入であり、かつ総論にあたるとともに、「宗教と社会の関係」を再考するうえでも必読の論考と言える。

寺院の社会活動（宗教の社会貢献活動）の認知や評価は決して高いものとはいえなかったが、東日本大震災での僧侶の支援活動や避難所としての寺院利用が知られることによって、僧侶の活動・寺院の公共性への評価の

高まりがみられた。だが、この機運は震災以前から徐々に醸成されており、アカデミズムやマスメディアで宗教の公共性・公益性についての議論が重ねられていたと大谷は指摘する。大谷はその社会的背景として、①オウム真理教地下鉄サリン事件（1995年）をきっかけとした宗教法人法の改正（1996年）、②2000年代前半以降の公益制度改革の実施、③1998年以降の社会福祉基礎構造の改革、④2000年代半ば以降の政府による「新しい公共」の提言の4点を提示。①②によって、「宗教法人の公益性とは何かが問題となり、その説明責任が宗教法人に問われ」（30頁）、③④では、社会福祉や公共サービスが、公（官）から民に移譲・分散されることになり、宗教者や宗教団体が「国や地域レベルの福祉の担い手として公共空間に（再）参入する機会」（30頁）、「より積極的にコミュニティ政策と地域ガバナンスに関与する機会」（31頁）になった。つまり、社会から宗教者に社会活動を求める要請と需要の両者が揃ったのが、この時期であったと考えられる。また、社会制度・意識の変化と軌を一にして、我が国の宗教研究（エンゲイジド・ブディズム研究、宗教の社会貢献研究、ソーシャル・キャピタル研究）の大きな進展、メディアの好意的報道があり、複合的な要因によって、僧侶の社会活動が促されていった。

大谷は、現代の寺院の公共性を考えた時、戦前に求められたような国家に関係する公共性（official）ではなく、誰に対しても開かれていること（open）が重視されていると指摘し、「一般の不特定多数の人たちのニーズとその精神的なニーズに応答し、『寺を開く』ということが、寺院の公益性であり、公共性であるということになる」（43頁）と定義する。「寺を開く」とはどのようなことか、どうすべきかという問いが浮かぶが、大谷は、パットナムのソーシャル・キャピタル論を手掛かりとして、社会的なつながりのネットワークこそソーシャル・キャピタルであり、檀信徒をつなげる結合型ソーシャル・キャピタルが従来の寺院だとすれば、人々や情報をつなげる橋渡し型ソーシャル・キャピタルを形成することが「寺を開く」ということになるという。つまりは寺院・僧侶が、檀信徒か否かにかかわらず、人々と「ともにする」、「ともにある」ということが「寺を開く」ことになるのだ。伝統をもとに、社会のニーズに応じて、つねにアップデートされてきた仏教の歴史を見れば、「ともにする」「ともにある」ことの必然性は自明のことであり、それが「なぜ、お寺が社会活動を行うのか？」の答えとな

る。

第二章では、寺院への供物を母子家庭や生活困窮者を支援する団体に「おすわけ」として提供する特定非営利法人おてらおやつクラブを2014年に立ち上げた浄土宗僧侶・松島靖朗が、その発足経緯、理念やシステムについて論じる。おてらおやつクラブ立ち上げのきっかけは、2013年に大阪で起きた母子餓死事件であった。「この豊かな日本で餓死が起こるということに大きなショックを受けた」(51頁)松島は、「お寺の『ある』と社会の「ない」をつなげる活動」を始めた。2019年2月時点で登録寺院は全国1035カ寺、408の支援団体と連携し、毎月約9000人の子どもたちがおやつを受け取っている。

当初、支援団体への寄付という「後方支援」に徹していたおてらおやつクラブは、活動・運営が安定していくなかで、母子家庭の母親からの直接の問い合わせに答え、支援をしていく「直接支援」にも展開を見せている。自助・共助・公助からこぼれ落ち、取り残される貧困家庭への直接支援を「仏助」とすると松島は位置づける。その意図は、「仏さまが私たちを見捨てず救ってくださるように」(67頁)、おてらおやつクラブもその家庭に寄り添い、見守り続けるというもの。社会福祉的な活動でありつつ、根底に仏教徒としての信念がうかがえる。

2018年、おてらおやつクラブは「既存の組織・人・もの・習慣をつなぎ直すだけで機能する仕組みの美しさが高く評価され」(74頁)、グッドデザイン大賞を受賞した。この評価理由からも分かるように、「おてらおやつクラブはゼロからつくりあげた取り組みでは」なく、「数百年単位で続く、地域に根ざしたお寺というネットワークを活かし、人と社会をつないでいく」(74頁)ことに、その真の役割があると論が結ばれる。

第三章は、自坊でアイドルをプロデュースする浄土宗僧侶・池口龍法が、なぜ「お寺×アイドル」プロデュースに取り組むのかを論じる。池口が住職をつとめる京都・龍岸寺では、2015年から毎秋、十夜会を現代的にリメイクした念仏体験を中心としたアートフェス「十夜祭(2018年は超十夜祭)」を開催、その運営の中心は大学生が担っている。2016年の十夜祭に向けた池口と学生たちのミーティングで、アイドルプロジェクトの話が生まれ、

学生たちが奔走し、浄土系アイドル「てら＊ぱるむす」のデビューにたどり着いた。(グループの名称、メンバーの名前、歌詞などには全て仏教がベースになっている)

池口のもとには、寺院を会場にして何かをやりたいという要望が日々届くという。「おもしろいんやん」と感じた提案があれば、一つ一つに丁寧に対応するという池口には、「伝統や慣例をいたずらに否定するつもりもなく、現代の感覚といかに融合させ両立させるか、という課題に真摯に向き合いたい」(87 頁)という強い思いがある。伝統と現代の融合・両立について、池口は「お寺の内部事情と外側からのニーズをいかにして架橋するか。(中略)先祖供養の場、信仰の場としてのお寺の役割をますます高めつつ、最先端の文化とも共存していく——そういうお寺づくりを私はやろうとしてきた」(89 頁)とも語る。アイドルプロジェクトはその最たる例だ。そして、共存するためには伝統への配慮は欠かさない。「住職がきちんと想いを伝え、そして、総代や檀信徒にも迷惑をかけないようにすれば、多くの方々が協力してくれる」(92-93 頁)という。

池口は、寺院・僧侶と接点をもたず、興味を持つに至らない人は、「仏教の奥行き深さに出会うことなく、いつしか目を向ける必要のないもの」というステレオタイプができあがり、心の扉を閉ざしてしまう」と危惧しつつ、「しかし、いったん心の扉を開いたら、見える風景はまるで変わる」と指摘する。(97 頁)そのためには、「住職である私の価値観を押しつけるのではなく、関わっている人たちが、主体的になって頭を働かせ体を動かしてもらいたい」(98 頁)と分析。アイドルプロジェクトにおいても、学生たちが主体的に考えた時にはじめて、寺院の見え方が変わってきたはずだと池口は考察する。

第四章は、浄土宗の総本山知恩院が 1998 年から推進するサラナ親子教室事業について、浄土宗僧侶・関正見が論じる。サラナ親子教室は、寺院を会場として、母と子が集い、遊び、学び、食事を共にする、いわば寺院による子育て支援の先駆けとなる事例である。そ目的は、①バックアップを失った母親の悩みやストレスを軽減する場を提供する、②母親を支援することで親子の心の絆を確かなものにし子どもたちの安心感を高める、③子育てに親子の人間関係を超えた仏さまの眼差しを取り戻すことでより豊か

な情操を育むこと、とされるが、もう一点、「本来持っていた様々な役割を失い、葬式仏教に縮小した寺院が、檀家組織の枠組みを超えて直接若い親子と関わり合うことで、閉塞した状況を打ち破り活性化を図る」(112 頁) 狙いもあったと関は述べる。

滋賀県の少子高齢化が急速に進む町で住職をつとめる関自身、妻とともに知恩院が開くインストラクター養成講座を受講し、自坊でサラナ親子教室を 2003 年からスタートさせた。回数を重ね、年数を経るにしたがい、寺院も地域の雰囲気も変化したという。「檀家の枠を超えて広く地域社会の人がお寺の門をくぐってくださるようになり、(中略) 閉鎖的な雰囲気が開放された」(118 頁) のだ。親にとっても子にとっても良い影響があることがアンケートから示されるとともに、寺院の閉塞感を打開するという隠れた目的も達成されたことがうかがわれる。

第五章は、広島県北部、三次市を中心とした浄土真宗本願寺派の仏教婦人会のビハーラ活動を宗教社会学者の猪瀬優理が論じる。仏教において女性は従属的な立場として描かれることが多く、現代の仏教教団内でも男性中心主義的な運営が見られる。そこで、猪瀬は、「仮に寺院を存続させるために女性の労働が無償で搾取され続け、そこに労働を提供している女性自身がその労働の提供に十分な意義を見出せないような状況にあるのなら、そのような寺院を女性たちが支えなければならない客観的な理由ない」と仮定し、広島県北仏教婦人会の活動を取り上げ、「仏教における女性の信仰に基づく活動が意義あるものになるために必要なことは何であるのかを確認」することを本章の目的とする。(133 頁) ちなみに、仏教婦人会の構成等は詳述されていないが、各寺院で門信徒の女性を婦人会として組織しているものと思われる。

広島・県北仏婦ビハーラ活動の会は、1990 年に本願寺派備後教区三次組の仏教婦人会において発足し、やがて近隣の 5 つの組 (一つは安芸教区) からも参加を希望する声があり、教区を超えた団体「広島・県北仏婦ビハーラ活動の会」が生まれた。三次市内にあるビハーラ花の里病院 (本願寺派寺院が設立母体) において活動を行い、「事前学習会、病棟でのボランティア活動 (シーツやタオルを畳むなどの軽作業)、ビハーラ法話会の法話の聴講、事後の反省会」(137 頁) が主な活動内容である。

これらの活動は、「従来の女性の役割の範囲内で行われて」おり、『「仏教者」としてのわかりやすい独自性は見えにくい」ものの、その活動の意義は、「従来の性別役割や既存の寺院のつながりや活動」を「自覚的に捉え直し、そこにこそ価値を見出してきたところにある」と猪瀬は指摘する（150頁）。猪瀬は、発足以来長年にわたり会長をつとめた藤井睦代を取材し、「してあげる」ではなく「させていただく」という気持ち、「専門家ではないただの主婦がする」という姿勢など、活動する側の内面の特色を見出し、そこに自発性を読み取っている。女性の意欲・動機が従来の性別役割分業に押し込まれるのではなく、「これまでの女性の位置づけや意味づけを捉え直し、女性自身にとっての意味のあるものとして変えていく」（151頁）活動の意義・可能性を指摘して論は結ばれる。

第六章は、病床での傾聴、スピリチュアルケアを2001年から始め、2006年からは遺族の分かち合いを主催するなどグリーフケア（死別の悲嘆ケア）にも従事してきた浄土宗僧侶・大河内大博が、グリーフケアを切り口に葬式仏教の捉え直しを行う。まず、大河内はスキルに従事する現在のケアのありかたに疑問を投げかける。今、僧侶に求められるグリーフケアは、技法ではなく、遺族との対話を通して「亡き人の所在」に光を当てていく生き方であるという。葬式はまさに、死者の行き先を指し示す儀礼であり、僧侶はグリーフケアの最前線にいたはずである。しかし、僧侶はその意義を忘れ、儀礼遂行にばかり注力してしまった。僧侶は深い反省とともに、儀礼の意義を再確認しつつ、遺族との対話を精進する以外にない。遺族は亡き人について語る時、亡き人と「出会い直し」をし、今も亡き人と絆が続いていることを感じる。だからこそ、僧侶は対話の聴き手として思いを受け止める覚悟、信仰を語らずとも伝わる生きざまが求められる。

また、大河内は寺院という場の重要性を「亡き人について語り、亡き人と出会い直す場として、お寺がその役割を担うのは自然なことである」（171頁）と述べる。しかし、だからといって、寺院のなかで、僧侶は教義を押し付けてはならない。一方、アウェイである病院や地域に出た際には、僧侶として他職種と連携できるコミュニケーション能力が必須であるともいう。寺院という、いわば僧侶にとってのホームでは、僧侶は教義をふりかざすのではなく、多様な死生観、亡き人についての語りにも耳を傾ける臨床



力が求められ、他方、アウェイでは、あくまで「僧侶として」連携する協働力が求められる。ホームでは僧侶を控えめに、アウェイでは僧侶の矜持を意識するという、ギアチェンジする感性も今後の僧侶に求められる資質であると指摘する。そして、ホームであれアウェイであれ、僧侶は「亡き人との出会い直しをする語りを紡ぐ場」を開放・創造し、かつ、遺族の紡ぐ言葉をジャッジせずに、ただありのまま受け止める「よい聴き手」であること、大河内はその進展への期待を記して、論を結ぶ。

第七章では、滋賀教区浄土宗青年会が2010年から取り組んでいる「おうみ米一升運動」について発起人である浄土宗僧侶・曾田俊弘が論じる。檀信徒が寺院に米をお供えする仏供米の習慣のある滋賀教区で生まれたこの運動は、仏供米をフードバンクに寄付するというもの。その集荷量は2018年で5トン、東日本大震災の2011年には11トンを超えたという。フードバンクを経由して生活困窮者や母子家庭の支援団体へ配られるほか、浄土宗のネットワークを活かして、直接被災地に届くこともある。また、他の地域でも、この運動を参考にした「〇〇米一升運動」が展開されている。

「おうみ米一升運動」の特徴と意義として、曾田は①「寺檀関係」と「寺院相互の関係」という伝統的な信頼関係のネットワークを活かした福祉実践を創出したこと、②寺院は地域（滋賀）と地域（被災地）をつなぐ橋渡し役を果たしていること、③寺院がNPOやその他の団体との協働による生活困窮者・被災者支援体制という「新しい公共」の構築の一翼を担っていること、④地域で誰もが主食の米を安定して確保できることが、安心して念仏を称えられる環境につながるという浄土宗ならではの活動、⑤「ご本尊からのおさがりのお福分け」という全仏教教団が共有できる社会貢献活動理念を創出したこと、と5点を挙げる。

特に①②③は、ソーシャル・キャピタルとしての寺院の役割を確認できるポイントである。また、①であがった「寺檀関係」を考えると、滋賀独特の「講」の習慣も忘れてはならない。滋賀教区の浄土宗寺院では講活動が盛んで、定期的に檀信徒が集い、念仏等を唱え、会食や茶話会を催し、信仰・親交を深めている。これは、結合型のソーシャル・キャピタルであり、おうみ米一升運動の成立基盤になっていると曾田は分析する。

第八章は、「寺を開く」先駆者ともいうべき、大阪・應典院住職の秋田光彦が、1997年に應典院を再建して以来の20数年を振り返りつつ、今後の展望を論じる。秋田は「寺を開く」とは、「参加であり、責任であり、そしてリスクでもある。また、社会に対し、繰り返し対話と協働を試みることである」と、ある種の覚悟を伴うことをまず指摘する。これは先例がないなかで、寺を開き続けてきた秋田だからこそ重みのある言葉だ。

阪神大震災とオウム真理教地下鉄サリン事件によって、寺と社会の関係、「寺とは何のためにあるのか」という問いを突き付けられた秋田にとって、「寺を開く」ことが自らの回答だった。「寺を開くとは、應典院の場合、その場に秘めたる根源的な力を社会に問い直すことだった」(215頁)という秋田は、若いアーティストや市民活動家との交流を通じて、應典院という場から「市民感覚の中に眠っていたスピリチュアルセンスが浮き彫り」(219頁)となることを感じていた。そして、若手僧侶が寺の外で活動をするようになり、「寺を開くとはただ外から受け入れるだけではない、仏教の側から外へ出ていく新たな局面を迎えて」(219頁)いた。

現在、應典院では終活に取り組んでいる。多死と孤立の時代に、人はどう旅立つのか。寺が中心となり、誰をも無縁にしないためのネットワークをつくり、さらに死は終わりではないという死生観を学ぶ場を寺が提供する。生者同士だけではなく、生者と死者をもつなぐ「吊いのコミュニティ」をめざすという。

秋田は「開かれた寺」とは、「多様な人を、場を、そして願いを呼び込む。差別しない。怖れない。受け入れるのだ。ともに苦しみ、ともに悩み、考え、ともに生きるのだ」(237頁)と論じる。おそらく、そこに寺という建造物は必須ではない。「堂宇があるからお寺なのではない。『お寺を開く』とは、僧侶自身が臨床をともに生きること」(229頁)と秋田が言うように、僧侶・仏教者の生き方を指す言葉なのであろう。

### 3. コメント

以下、評者の感想と若干のコメントを述べたい。

各章を通読すると、おそらく大谷の意図を各執筆者が理解した上で、書かれていることが推察される。各章では「寺を開く」、「ソーシャル・キャ

ピタル」、「公共性」ということに言及されており、そのおかげで多種多様な活動の論考を、一本の縦串が通っているように読むことができた。

大谷が本書の目的とした三つの再考は、おおむね成功していると考えられる。日本仏教＝葬式仏教という常識の再考については、言うまでもない。各章で取り上げられた活動は、いずれも生者との関わり、しかも寺院・僧侶だからこそできる生者との関わり方であり、固定観念を持っていた読者ならば大きく揺り動かされるであろう。池口や秋田の論考からは、社会活動の前提として、他者を受け入れ、会話を積み重ねることが必須であることが示され、それは大河内が述べる「教義をふりかざすのではなく、多様な死生観、亡き人についての語りに耳を傾ける臨床力」に共通するものがあるように思われる。「寺を開く」という時、単なる空間を開放するのではなく、僧侶・仏教者の心のあり方が問われてくるのだ。

また、「葬式仏教」の内実に関しても、大河内と秋田の論考によって、葬儀がいかに生者のためにあるものかということが認識させられる。特に、大河内の論は、長年の実践を踏まえているだけに説得力があり、葬式が死者と生者がともにある場であり、僧侶のあり方次第で葬式だけでも十分に社会活動たりえることが理解できる。

三点目の公的領域への関与のあり方は、仏教はそもそもが人々と「ともにある」「ともにする」ものであることを理論的に大谷が示し、第二章以降の事例によって例証されたと思われる。

企画意図を十分に満たしたと思われる本書だが、若干の批判的コメントもくわえておく。

各章の執筆者は、大谷と猪瀬をのぞいて、全て実践者（大河内、曾田は研究者でもあるが、実践者としての比重が大きく感じられた）というのが本書の魅力でもあるが、総論担当の大谷は別として、猪瀬の論考が他と比較すると、縦串がうまく通っていない印象を受けた。立ち位置の違いもあるであろうし、ジェンダー研究の視点からの論考が異色に映ったのかもしれない。だが、各章の実践者が全て男性であることや、ソーシャル・キャピタルにはしがらみという負の側面があり、宗教組織の中に男女の不平等が厳然と存在することを考えた時、猪瀬の論考が本書にあることはきわめて誠実な態度とも考えられる。

次に宗派の偏りである。評者は、これまでの研究や社会活動の実践経験

から、宗教者は、外面は一般人のそれと変わらない社会活動をしていても、活動のなかでの葛藤や挫折を通じて、自身の信仰と向き合い、深めていく傾向にあると考えている。猪瀬論文では浄土真宗本願寺派を取り上げているが、その他は全て浄土宗僧侶である。浄土宗や浄土真宗は自身を凡夫と考える人間観に立脚しているからこそ、僧侶／一般人という垣根を低くしやすいのかもしれないが、そのような比較をするうえでも、他宗派の実践者の事例・思想も収録されることを望む。

また、今、人口減少、少子高齢化が進展するなかで、寺院の檀家は減少し、経済的に不安を抱えている僧侶は少なくない。住職が兼業をして維持をしている寺院は過半数ともきく。寺院の統廃合も増えている。僧侶はなかなか希望を持たず、兼業をしていれば、寺院運営に割くエネルギーもないという現状がある。そのような寺院・僧侶が、「このお寺みたいには無理」と諦めてしまわないような、「うちもなんとか頑張れるのではないか」とエンパワーメントされるような事例もあればと思う。

とはいえ、本書は時代を切り開く実践者たちの体温が伝わる報告と、大谷による丁寧かつ明快な整理・理論の提示によって、まさに「お寺の社会活動最前線」を把握・理解をすることができる良書である。本書の執筆陣に感謝するとともに、今後の活動の発展を期待したい。

## 註

- (1) 拙稿「僧侶による“脱、社会活動—自死対策の現場から」(西村明編『隠される宗教、顕れる宗教』岩波書店 2018)。